村松定史氏が併せて指摘されているように、村松進と南極探検の出会いは、兄の関与によるものだったのかも知れない。白瀬矗の名刺帖[19]には「医学士　村松鍬三」の名刺（鍬三は學佑の実名）が綴じられており、これは白瀬と學佑の関係性を示唆するものでもある。ただし、後述するように白瀬は南極からの帰国後、甲府桜町の村松學佑邸を訪れており[20]、白瀬と學佑の交友についての時期や程度に関する分析と評価は、今後の調査の課題といえるだろう。

二、村松進の南極探検　その航程・豪州・南極

村松進を南極探検船開南丸の船員として擁した白瀬南極探検隊は、明治四十三年（一九一〇）十一月二十九日に東京芝浦港を発した。まず、彼らの一年半と三万マイルにもおよぶ行程を略記してみよう。

○明治四十三年
十一月二十八日　白瀬隊送別式
十一月二十九日　開南丸、東京芝浦港を出港
○明治四十四年
二月八日　開南丸、ニュージーランド・ウェリントン寄港
二月十一日　開南丸、ウェリントン出港
三月三日　南極圏に入る
三月十四日　南緯七四度一六分東経一七二度〇七分附近の氷海で前進を断念
五月一日　開南丸、オーストラリア・シドニー寄港
隊員らはシドニー郊外でキャンプ生活
野村直吉船長ら一時帰国
五月十七日　一時帰国の多田恵一ら甲府来訪
九月二十八日　開南丸、シドニー出港
十一月十九日
○明治四十五年（大正元年）
一月十六日　南極初上陸、附近を開南湾と命名
一月二十八日　白瀬ら突進隊、南緯八〇度〇五分西経一五六度三七分附近に到達、附近を大和雪原と命名
二月四日　南極を離れる
三月二十三日　開南丸、ウェリントン寄港
三月三十日　白瀬、村松進ら別船でウェリントン出港（シドニー行き）
五月十六日　白瀬、村松進ら日光丸で横浜着
五月二十日　村松、武田輝太郎学術部長と甲府に入り講演
六月二十日　開南丸、芝浦に帰港
八月二十日　白瀬ら甲府で講演会、村松學佑邸を訪問

白瀬南極探検隊の芝浦出港の際には、村松進の地元の「山梨日日新聞」が次のような記事を掲載している[21]。

出発前の村松進　個人蔵

●探検隊と村松氏

南極探検隊の一行に加はりたる本県出身村松進氏は、一昨日出発したるが、此れを見送りたる在京内藤松影氏[22]よりの通信によれば、其意気や頗る壮烈、初めは単に船員たりしも、出発に臨み特に上陸隊、即ち決死隊に加はりて血判せりといふ。尚ほ、村松氏は発程に臨み、左の二首を示されたり。[23]

搭開南丸上南極探検之途賦此

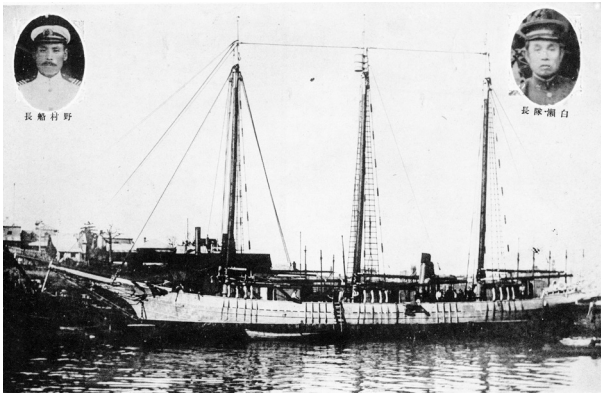
涓滴未酬家国患。壮心遮莫此躯存。
図南三萬八千里。意気衝天出海門。

同

不期此行身命全。赤心唯誓報語賢。
悠々極地知何処。笑上南溟萬里船。

峡雲　村松進

（明治四十三年十一月三十日付）



南極探険記念絵葉書（南極探検船開南丸）
山梨県立博物館蔵（村松家文書）

かくして、南極探検の旅に踏み出した村松進の南極探検船員、そして南極探検隊員としての軌跡は、隊長である白瀬矗と絶妙な距離感でみることができる。村松進はもともと探検船員で機関士という、南極探検本隊の要職でなかったにも関わらず、中途で白瀬の隊長秘書に就任する。さらに南極大陸内部を目指す白瀬ら突進隊五名のサポートを担い、南極での上陸根拠地を守る観測隊二名の一員にも就いている。そして、白瀬とともに先行帰国する一員にもなっており、村松進は隊長白瀬矗の極めて近い立場を占めるようになるのだが、一方で後述するように白瀬と袂を分かつこととなる書記長多田恵一とも、帰国する直前まで強い友誼で結ばれていることが興味深い。

多田は、帰国後の著書『南極探検私録』において、村松進の人となりについて、次のような記述を残している。

甲板上に踞（きょ）して得意の曲を奏ず、聲のよき土屋運転士、村松機関士、藤平火夫、吉野隊員の諸君もまた来集して俗曲に合唱す（明治四十三年十二月十日）

碁の大関は村松と乃公（ないこう）（明治四十四年一月十六日）

南極を目指す旅は、人々にとって今も昔も荒波の航海の困難さを乗り越える過程でありつつ、その長期間ゆえの無聊とのたたかいでもあった。彼らはその一面では長く退屈な旅をさまざまな工夫を凝らして乗り切ったが、そのなかで村松進は歌曲などの芸で目立つ存在でもあったようだ。また多田と並ぶ囲碁の名手としても君臨し、多田とは囲碁を通じて多くの時間を共に過ごしていたようである。

村松進の芸達者ぶりは、多田の『南極探検日記』[24]にもたびたび記されている。

次でいろ〳〵の隠し芸が出る。藤平船員の義太夫は秀逸、土屋運転士の薩摩琵琶、吉野隊員の同じく薩摩琵琶共に巧妙。渡邊水夫の伊予節は御国自慢の一ツ、村松機関士の手踊、これは本人嘗て新俳優を志願した事があつたといふ丈、若干の素人離れがして居る。（明治四十四年一月二日）

沐浴が畢（おわ）つて、夕食後は月下で、義太夫のおさらへが盛、藤平、村松、吉野の各太夫が白眉である（明治四十四年一月十四日）

（シドニー滞在中、在留日本人の来訪の際）其後餘興が始まる、蓄音機を始として、藤平火夫の義太夫、村松隊員の手踊、三井所君の剣舞、吉野隊員の薩摩琵琶、予の詩吟と尺八、何れも長途の航海中、鍛錬の功を積みたる丈あつて、新来の聴衆をして、大なる拍手喝采を払はしめた。（明治四十四年五月六日）

歌以外にも手踊りの達者ぶりが、隊員のなかでも指折りであることが記されている。村松進は趣味人というよりも、芸事で身を立てる志向もあったことが示唆されている点が、彼の人物像を考えるうえでも興味深い。

囲碁については多田が自らと隊員中の双璧となぞらえるほどの腕前だったようで、隊長の白瀬も『南極探検』[25]において「午後将碁の会合あり、多田書記を筆頭に村松高取酒井高川諸氏が剛の者だといふ」（明治四十四年一月二十九日）と記している。多田は村松進を余暇の囲碁の好敵手として、時にはつまみ食いなど逸脱の盟友として、長い旅路のなかでかなりの時間をともに過ごすさまを、『南極探検日記』にたびたび記している。そして、それは多田が白瀬との溝を深めることとなる南極からの帰途まで続くのである。隊長秘書で明らかに「白瀬派」である村松進の多田との交友は、自ら党派に囚われず、また周囲からも偏向視されない、村松進の開放的な、あるいは恬淡とした人柄を想起させる。それでは、『南極探検日記』にみえる、多田と村松進との親交ぶりをみてみよう。

囲碁での大関は村松機関士と予とである、今日も村松君と二番試みて互に一勝一敗の汾（かか）であつた。（明治四十三年十二月十一日）

村松機関士は不快だといつて昨日から休養して居る。熱らしい。村松君は予と囲碁の好敵手である、驍将に休まれては何となくものさびしい。「碁敵は憎くさも憎し可愛らし」とやら川柳で見たが、全くだ。

午後は船首室では将棋が盛、何しろ大関はかく申す乃公、高取と村松が関脇、酒井が小結、前頭筆頭高川、次は安田、釜田、西川、吉野、三浦、渡邊とマアこんな順序だ。（明治四十四年一月二十九日）

餘興の美人絵ハガキ展覧会で鬱を散じた。（略）結局、武田、西川、渡邊水夫、吉野、村松の所持が順次優等品と極はつて、隊員から微賞をもらひ、大に自惚心を発揮して居る。（明治四十四年十一月二十七日）

夕食後、村松と囲碁す一局丈けやる、一目の差で彼れに、勝を占められたのは遺憾である。彼れの鼻の高きこと数尺。（明治四十四年十二月十三日）

腹が空いたので厨夫部屋に行くと今日は生憎残飯がないので、いろ〳〵捜索の結果素麺の五六把あるのを発見して、夜食党の相棒村松と二人で素人料理にこれをうでると、二人共初めての経験としては甘（うま）く出来上つたので早速バクツク、が併しお汁はダシがないので若干不味いが、食事時間以外の間食とあつては我儘もいへぬ次第である。（明治四十四年十二月二十七日）

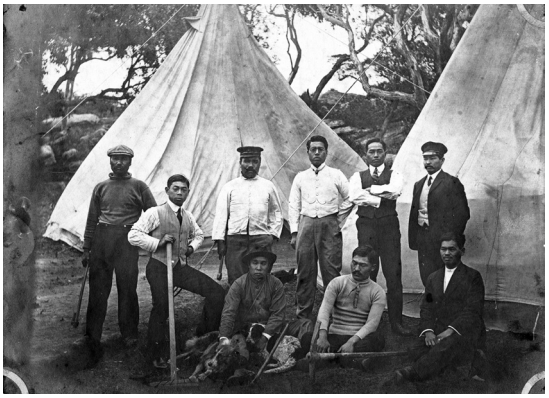
予は村松を相手に夕食まで囲碁したが、今日は勝敗相半ばした。今後は得点を記入して、どちらが多く勝星を占めるか、累計して見ようといふことにした。何しろ本船では他は予等以上の笊党であるから、にくさもにくしまた可愛いといふ、好敵手ときたらこの両人丈である。正に是れ当船の信玄と謙信である。（明治四十五年一月八日）

午前三時夢が破れて、空腹を感じるので、厨夫室に行くと、これも同様で起きた、村松と共に塩鮭を焼いて、将に凍らんとする冷飯を温ためて飢を醫し、ストーブに温まつて、又寝る。（明治四十五年一月十八日）

午後、村松と囲碁して、昨日の敗を雪ぐ、これから又囲碁敵が合したので日々火花を散らすことゝなる、（明治四十五年二月六日）

予は村松と約して廿五回の勝星を決勝点として、シドニー出航以来、黒白を闘はしつゝあつたが、今日の第四十三回目の手合に於て、遂に敵をして塁を奪はれてしまつた。一時は十一勝迄得た予も、近来脳力を腐らした故か、脆くも敗軍となつてしまつた。将棋に於ては数等の兄たる予も、囲碁では一籌を輸さなくてはならぬことゝなつた。開南丸中の囲碁と来たら、非常なる間隔がある。予や村松に二子或は三子を置かしむる、三井所君に、西川は九子を置く、（略）而も大関たる地位にある我等両人が、初段に七八子を置くといふ有様では、餘りに熱を吹かれぬ腕前で□る（明治四十五年三月十三日）

このように、多田が一時帰国した半年余りを除いて、村松進とはかなりの時間を共有していたさまがうかがえる。そこには、同好の士としての親愛の情を超えた信頼があったかにみえる。しかし、南極からの帰途、日に日に悪化する多田の白瀬への感情と関係のなかで、村松進に関する記述は少なくなっていく。



「明治44年９月写之　濠洲シドニー郊外キヤンプに於ける南極探検隊員」個人蔵（後列左から山辺、村松、花守、武田、吉野、三井所、前列左から白瀬、西川、渡邊〈近〉）

南極からの抜錨まもない明治四十五年二月十七日の記述には、「午後隊長は西川、吉野、村松三隊員を集めていろ〳〵談ずる処があつた、例の卑屈な心を満足する相談の由、渡邊と余とは興からず、何処迄も除外例さるゝのである。」との記述がある。そして、明治四十五年三月二十七日には、「今回この地から隊長は武田、村松両君を連れて帰る、池田、田泉両君は、衰弱の為め同伴す」と多田は記し、開南丸を置いて先に帰国する白瀬とのあいだの溝は決定的なものとなるのである。

夜更けて村松君と当分最終の囲碁を試みた、互に二勝二敗一汾にて勝負なしであつた。（明治四十五年三月二十八日）

最後の多田と村松進との対局の記録は、別離の前々夜、このような簡潔な記述で終止符を打たれている。

ちなみに、多田は一時帰国中、村松進の郷里である山梨を訪れ実兄の村松學佑（鍬三）らと会っている。「甲府市の遊説」との項で次のように語られている。

明治四十四年九月二十八日
午前五時出発、甲府に向ふ。午前十一時甲府着、米倉旅館に投宿、天生目氏と会した。午後各新聞社及村松隊員の阿兄（鍬三）氏の甲府病院を往訪した。そしていろ〳〵馳走になりつゝ、家族と物語った。午後五時、市会議事堂に於ける、全国商業会議所、役員会議席上にて、甲府商業会議所長、内藤氏の紹介で、一場の探検談をなし、尚未だ遊説せぬ地方の諸氏に対し、義金募集方の尽力を乞ふた。天生目氏も出席した。
夜は山本節氏、村松覺夫氏等来訪、いろ〳〵打合をした。
明治四十四年九月二十九日
午前中、村松覺夫氏と同道、知事、市長、若尾氏、其他市内有力者数氏を歴訪して、後援会甲府支部設立の件に付、尽力を乞ふた。
午後甲府中学校及同師範学校で、一場の演説を試みた。生徒の外に有志者も、多数傍聴された。
午後五時、甲府を出発、帰京の途に著く。午後十一時飯田町着。

多田は甲府で開催の会議にて探検隊への協力を訴えるために訪れたようだが、學佑のほか、次兄の覺夫や山本節（峡雨）、若尾（逸平か民造かは不明）

とも面会しており、探検隊をめぐる學佑を中心とした山梨の人脈や、当時の山梨での南極への関心度を考えるうえでも興味深い。資金難に陥っていた白瀬南極探検隊（南極探検後援会）の広報の一環として、このような来訪を甲府政財界に対しておこなった裏には、山梨における指折りの有力者であった學佑の周旋によるものであった可能性もあり、今後の調査の課題であるともいえる。

そのほか、多田をはじめとする他の隊員の記録からは、村松進の隊員としての力量や役割についても垣間見ることができる。多田によれば村松進の探検船員から探検隊員への異動は往路の船中で既に懸案とされていたようで（本章冒頭引用の新聞によれば出発の当初に決死隊への加入に血判とあるが）、シドニー到着後に正式なものとなったようだ。白瀬矗の『南極探検』には「あまり長閑なのでボートを降ろしてまた信天翁（あほうどり）の猟に出かける者もある。銃猟の名手は三浦、西川、村松、多田の諸氏。但し百発百中は受合れぬ。」（明治四十四年四月十六日）とあり、銃の名手としての定評もあったようで、食料や標本の調達のための狩猟に力量を発揮している。多田の『南極探検日記』には、囲碁や間食の友にとどまらない村松進の姿も描かれ、その観察眼によって危機を回避した実例や、器用ぶりを示すエピソードも記録されており、マルチな実力と存在感をもった隊員像が目に浮かぶ。

今日も風波静穏、昨夜遅く迄起きて居たので寝坊して出て見ると、村松は珍ら敷早起して今朝のサンライトを見た、頗る美しかつたと話す、（略）又村松は此朝ペンギンの叫聲を耳にしたといふ（明治四十四年十二月五日）

ソレナラ後方に居る村松、花守等の一隊と協力してウオークせんものと、其方向に行きかけると、村松は突然叫び出した。今我々の乗つて居る氷が将に割れて離れつゝあるのを警告したのである。スワコソ大事とヘコタレ先生も腰をあげて一目散、もう二三分遅いと離れ小島となる処の、危険なる場所からヤツと安全界に遁れ入ることが出来て、恐怖と滑稽の両レコードを作つた。（略）「村松の注意がなかつたら、今頃は新式の鬼界が島となつて助け船を呼んで居る処である。不面目〳〵」（明治四十五年一月十八日）

今日、機関長と村松とは、蓄音機の破損したのを修繕すべく、終日力めたが、遂に成功しなかつた、適当な修繕具さえあらば、直るのであつたが、多大な労力も無駄に帰した。（明治四十五年三月二十一日）

多田の視線が中心ながら、こうした記録から、隊員のなかでの村松進は、その才覚や器用さによって、白瀬や多田だけでなく、多くの隊員と協力や信頼の関係にあったことだろうと想像できる。他の隊員と村松進の関係を知る手がかりとして、日本人最初の「南極料理人」であった渡邊近三郎から、戦後になってから村松家に宛てた手紙[26]が残っている。

前略七日御手紙忝く拝見、本統（ママ）に惜しく存じます。私達一行廿七名ノ内大部分他界せられ、現存者は七名と云ふ心細さに成りました。せめて吾等生存中に他界せられし隊長以下の慰霊祭位行ゐ度とは思ゐつゝ、数年を過しました。貧者の私たちにわ唯心に思ふのみ、実に残念に思ゐ居ります。偖（さて）村松氏とわ（ママ）存命中特に親しみ深く、氏が新宿に行かれた時、又本郷に居住の時などの思出でわ殊ノ外深く感ぜられます。何れ其内隊船員諸氏の慰霊祭執行の時も来ると思ふ。其節わ御出席を願度存じます。私達の連て行た犬も可哀想でした。どうか村松氏も地下で喜んで呉れる事を祈て居ます。

村松進と渡邊は年齢も近く、同じく内陸県の出身（渡邊は岐阜県出身）で、隊員中での立場も近く、共に行動することも多かったことから、特に親しみが深かったのだろう。書簡が交わされた二年後の昭和三十五年（一九六〇）十一月二十九日、「白瀬南極探検隊五十年祭」においては、渡邊は元隊員としてあいさつをしているが、村松家資料に残されている当日に配付された名簿に、「渡辺氏、最もよく進君のことを知つてゐました。」とのメモ書きが残されている。[27]なお、渡邊の「南極料理人」としての活躍ぶりは、『婦人世界』に連載された「南

極探検隊の料理日記」[28]にその一端をみることができる。

村松進も、渡邊と同様に南極探検での体験を雑誌『成功』に連載している[29]。「南極探検隊の濠洲キャンプ生活」と題し、ユーモアを交えてその暮らしぶりを綴っている。村松進自身のことを記した部分や人となりを示している部分を抜き出してみる。

（隊員らのニックネームの由来について解説し）最後の我輩に至つては元来の悪戯者、数々の別尊号は勿論併有するの光栄を保つも、餘り長文に亘るを以て省略する。まづ大略は上記の如くで、其の協議方法は如何にと云ふに、毎週の日曜日午前開会の雄弁会席上にて、先週に起つたる事件を審査し、多数決を以て議定し名命式を行ふのである。（『成功』二二〈一〉）

以来本隊は如何なる所以か、宗教は仲々盛にて、何れも熱心なる信仰を持つのである。隊長の軍隊教育両勅語の奉読、及真宗の歓勤を初め、武田氏の高天ヶ原、三井所氏の真言宗、西川氏の日蓮宗、吉野氏のアーメン、渡邊氏の禅宗、我輩の孔孟宗と云ふ具合にて、読経御払祈祷の聲は静浄新鮮なる朝の空気に響きて、荘厳なる気室内に満ち渡るのである。（同）

凡そ大事業を成さんとすれば、先づ大困難に打ち勝つの勇気を養なければならぬ。而して大勇者にして尚且時に利あらざれば、亦意外の失敗を招く事がある。此の時に於て失敗を失敗とせず、再び立つのは真の大勇者にして、将た成功すべきものでる。（同）（※傍点は筆者による）

村松進は自らを「悪戯者」と表現し、多くの「尊号」を奉られていることを記している。このことからも、彼の隊員間での役回りを窺い知ることができよう。各隊員の信仰についての記事では、自身は「孔孟宗」であるとしたり、後の記事では「無宗教者」とも記している。また、勇気と成功についての意見においては、記事の趣旨[30]や「再び立つ」べき白瀬隊が追加の支援を必要としている状況を踏まえたものであろうことが読み取れる。とはいえ、ウェリントンから目指した南極は到達できずに終わり、再挑戦に向けてシドニーでキャンプ生活を送るという雌伏の時というにはあまりな現状のなかで、あくまで前向きに捉えて再起をめざす、村松進個人のあきらめない行動哲学を示している言葉ともとることができる。

『成功』への連載は、オーストラリア・シドニーでのキャンプ生活から、南極での体験に場を移して、「南極探検隊員滑稽談」として続き、観測隊として南極上陸後の根拠地を守っていた際、宿営中にカラフト犬の鼾に驚愕したエピソードや、開南丸のトイレにまつわる事件についてコミカルに記している。さらに連載は「南極探検隊員開南丸航走中の生活」と続き、水や食料の厳しい制限と工夫、船内の匂いや雨漏り問題などを紹介している。

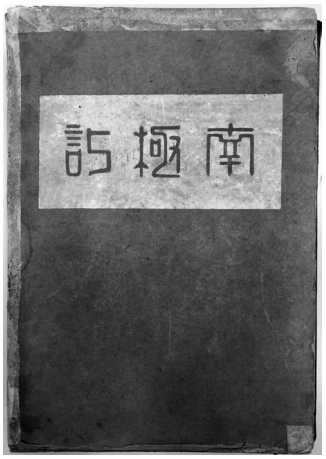
処が怪しい聲は依然として耳朶に入る、ハテナ・・・・、何だらう、自分は此南極まで決死の覚悟で来た男である、不審な聲を聞いて其正体が判らぬと云つて捨てゝ置くなぞは、隊の名誉にも関する訳である、イザ来れ、何物でも来れ、と覚悟して聲する方に近づいた、すると怪しい聲は益々高い響く、そこで私は満身の勇気を鼓して、ツト怪物に近づいて見ると、何の事だ、それは樺太犬の先生、よい心持になつて居眠りの最中、即ち猛獣の聲と聞いたは、犬先生の鼾声であつたので、吾乍ら滑稽なのに、覚へずカラ〳〵と哄笑した（『成功』二三〈三〉）

少し尾籠の話で恐入るが、開南丸の便所では、可なりの滑稽が演ぜられた、何分二百〇四噸といふ小帆船、大切なルームを便所などに十分に割くことは、到底許されぬ贅沢である、そこで宛で犬小舎同様の狭苦しい一画が拵へられて、用便すると直ちにそれが海水に吸込まれる仕掛、それが浪の荒い時は、ヂヤブンと便所の口から浪が逆襲して来るといふ始末、此不便極まる処を、誰か便所と命名したのかと、私は「開南丸一ト口噺」の一に加へて、傑作との高評を博した次第である。（『成功』二三〈三〉）

『日に一合の水では、仮令猫式としても、洗面上既に不足である、やつと口嗽ぎが関の山ぐらいのものだ、だから僕は明朝から一切洗面を廃めて、犬の仲間入をする覚悟だ、ナアニ南極へ着きさへすれば、雪解の水は幾らでも飲める』などゝ、口には云つても、実際は泣き出したい位である、入浴は最早絶望である、洗濯なども固より絶望である、今よりは半風子の先生、嘸かし殖民の繁栄を来す事であらう、斯かる境遇に立つて、始めて真の困苦欠乏の苦味を嘗める、之も人生一の修養と云はゞ云ふものゝ、サテ〳〵辛い修養ではあるまいか、殊に三井所衛生部長外二三名の如きは、十年来励行し来つた冷水摩擦をも廃せねばならぬのである。

就中、最も気の毒の情に堪へないのは、白瀬隊長の生活である、隊長は曾年、北洋探検に際し、寒い千島の絶涯で越年すること数回、其間猛熊を屠つては其生肉を喰ひ、其生血を啜つて暮したが、それ以来は寒中でも、単衣一枚で凌げる程の体温を保ち、厳冬未だ曾て火鉢を擁したこともなく、茶も飲まねば酒も飲まず、只だ三百六十五日の朝な夕な、冷水さへあれば事足りて居る、而もそれが隊長に取ると、宇治の玉露よりも、灘の正宗よりも、より以上の甘露なのである、米の飯よりも大切なのである。(『成功』二三〈四〉)

以上のように、村松進本人や多田恵一ら隊員の記録を中心に探検中の動向をみることで、村松進像を考察してきた。これまで、村松進の南極探検隊における活躍については、機関士や隊長秘書という地位は探検隊の組織において下士官クラスだと想像されることから、『南極記』などの公式的記録からはほとんどうかがい知ることができなかった。しかし、これらの隊員の残した記録や記事によって、ある程度の村松進個人の活動の状況やその志向するところを知り得ることができた。これらの資料からは、村松進という人物が、白瀬南極探検隊において探検の実務だけでなく、組織の構成上や人間関係の構築においても、欠かせないポジションを確立していたようにみることができる。今後は、さらに村松進像を掘り下げていくために、村松本人に関わる資料のさらなる発掘と、その調査や研究が必要であるとともに、別の隊員からみた村松進ついての検討も広く進める必要があるだろう。



『南極記』　個人蔵

三、帰国後の村松進

村松進は、隊長の白瀬矗らとともに、ニュージーランド・ウェリントンにて南極探検船開南丸から離脱し、オーストラリア・シドニーを経由して、日本郵船日光丸[31]にて帰国の途に就く。

「山梨日日新聞」は、帰国の途に就く彼らについて次のように報道している。[32]

●白瀬中尉シドニー着

東京日々新聞に達せる、濠洲シドニー通信員よりの電報に曰く、

白瀬南極探検隊長は、学術部員武田、池田、秘書村松、活動写真技師、病人一人を伴ひ、極地にて得たるペンギン鳥三十羽、鉱物標本其他の土産物を携へ、当地に来着せり。(探検の経緯略)

白瀬一行七名は、郵船日光丸にて来週帰朝する筈。すべての探検模様は、活動写真に撮影せり。

(明治四十五年四月七日付)

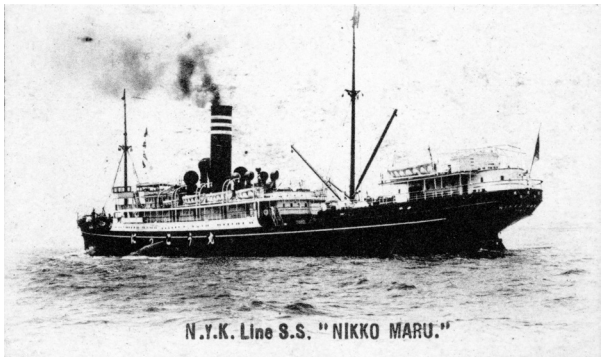
白瀬らが一足早く帰国するなかで、南極から開南丸の探検隊一行がウェリントンに到着した直後には、多田恵一の記録[33]に次のようなものがある。

たゞ今日、遺憾とするのは、後援会から一通の音信も、着して居ない事で

ある。村松に丈け僅か一通の、家信があつたのみで、これ丈は後援会のぬかりであるか、一行も最も遺憾とする処であつた。（明治四十五年三月二十三日）

資金難の探検隊にあって、食料や燃料もギリギリで寄港地に到着した一行にとって、支援する南極探検後援会からの連絡が入っていなかったことは彼らを不安に駆り立てたことだろう。そのなかで、村松進には実兄村松學佑ら実家筋からの連絡が入電していたのである。

そして、村松進らが日光丸での帰国を果たした明治四十五年（一九一二）五月十六日の「山梨日日新聞」に次のような記事が掲載された。[34]



日光丸絵葉書　個人蔵

●探検隊と村松氏

▼日光丸は本日横浜着

鵬程（ほうてい）正に一萬里、氷の海にペングイン鳥啼く南極の探検を企て、あらゆる苦艱と戦ひて目出度く目的を達したる白瀬中尉、並に本市桜町村松鍬三氏令弟進氏等の一行を載せたる日光丸が、十二日午前十一時三十分九州長崎港に帰着せることは既報の如くなるが、記者昨日桜町村松氏を訪ひたるに、鍬三氏は用事旁々進氏出迎への為め横浜に赴きたりとの事に、更に家人に就て聞けば鍬三氏の厳父[35]なるべし半白の老人出で来りて莞爾として記者を迎へ、「昨夕神戸から電報が参りまして、十六日正午横浜へ入港するから衣類を持つて迎へに着て呉れといふて来ましたので、恰度東京にも用事がありますので今朝早々に出掛けました、最近の便りと申しましても先々月頃シドニーから葉書が参つた許りで御座います故、甚麼（ママ）（どんな）様子かよくは判りませんが、特に着物を持つて来て呉れなどゝ申しまする所によれば、長い間の航海に衣類も何も滅茶々々になつて了ふたと見えます、何しても無事で還つたのは何よりの事と申すの外なく、後援会の方へも行かねばならぬだらうし、残つた一行が開南丸で帰る迄は帰郷する事は出来ますまい、従つて何時頃甲府へ来るかは判りません」云々と、忍び難き喜びの色溢るゝを見受けたり。

（明治四十五年五月十六日付）

記事中の「鍬三氏の厳父なるべし半白の老人」は、鍬三（學佑）と進の父である覺雄は亡くなっているので誰のことかは判然としないが、學佑が横浜へ出迎えに赴いたことや、帰国の際の村松進の状況をうかがい知れる記事である。その後も「山梨日日新聞」では数日にわたって白瀬らの帰国に関連した記事を掲載し、その盛り上がりのまま、探検隊学術部長武田輝太郎と村松進の甲府への訪問とその歓迎会、旧制甲府中学校での講演会の開催、横浜への出迎えから甲府に帰った學佑へのインタビュー記事を掲載する。

學佑へのインタビュー記事は、五月十九日・二十日に連載された長文のもので、村松進の帰国時の状況や、水不足や南極の地形や気候、過酷な探検の状況を中心とした内容となっている。そのほか、カラフト犬の南極への置き去りの実情や、南極で撮影した記録映画のハイライトとなるはずの南極への上陸シーンが、長崎での税関の不手際で露光して台無しになったことなどが記されている。

村松進らの凱旋歓迎会については、五月二十日に武田・村松らが来着し、甲府中学校において講演会と甲府商業会議所による望仙閣での歓迎会の開催されることを報道している。そして、五月二十二日から二十五日にかけての四日間にわたり、「渺茫（びょうぼう）たる海原を南へ南へ！　村松進氏の探検談」と題した、村松進が登壇した講演会の内容をそのまま紹介する長文の記事を掲載している。

その後も、「山梨日日新聞」では、開南丸が帰国する六月二十日前後も南極探検隊の報道に紙面を割いている。

そして、元号が明治から大正に改まる激動の夏、同紙は帰国間もない探検隊長白瀬矗らが甲府を訪れることを報じる。当初は白瀬の来訪ではなく、南極探検隊の記録映画の地方第一陣の甲府での開催を報じるものであった。[36]

演藝だより

▲南極探検活動写真　白瀬南極探検隊一行の探検実況を写したる天下一品の活動写真は、浅草国技館にて映写し一般の観覧に供しつゝありしが、地方興行第一着として当地へ来る筈、日取は多分本月十七八日なるべく場所其他は猶ほ未定なり

（大正元年八月十三日付）

そして、開催の初日にあたる大正元年八月二十日には次のような記事が掲載された。[37]

●南極活動写真会

▼本日より三日間巴座に於て

白瀬中尉の南極探険隊写真班の撮影したる活動写真は、今二十日より二十二日迄三日間、昼間は午後一時より、夜間は午後六時より開会の事に決し、村松進氏は既に準備の為め数日前入峡し居り。野村開南丸船長は昨夜入峡し、帝王ペンギン鳥、南極鷹等の実物を示して、親しく極地探検の講演をなすべしと、右活動写真は畏くも天皇皇后両陛下の天覧を賜り、皇儲殿下各宮殿下の台覧の栄を蒙り御感賞を忝うしたるものにして、曩に浅草国技館に於て開会し大喝采を以て迎へられたるものにて、今回広く全国巡業の事に決し、先づ第一に本県に来りたるものにして、極地の壮観偉観目前に見るが如くなりといふ。

活動写真会については、同紙に広告が八月二十一日・二十二日に掲載され、二十一日には白瀬の甲府への来訪を報じる記事、二十二日には開南丸船長野村直吉の講演の内容を掲載している。[38]

●南極探険隊長来る

南極探険隊長白瀬中尉は、同隊開催に係る活動写真講演に関する用向にて、昨日午後三時甲府駅着列車にて入峡したり。

（大正元年八月二十一日付）

●野村船長の談

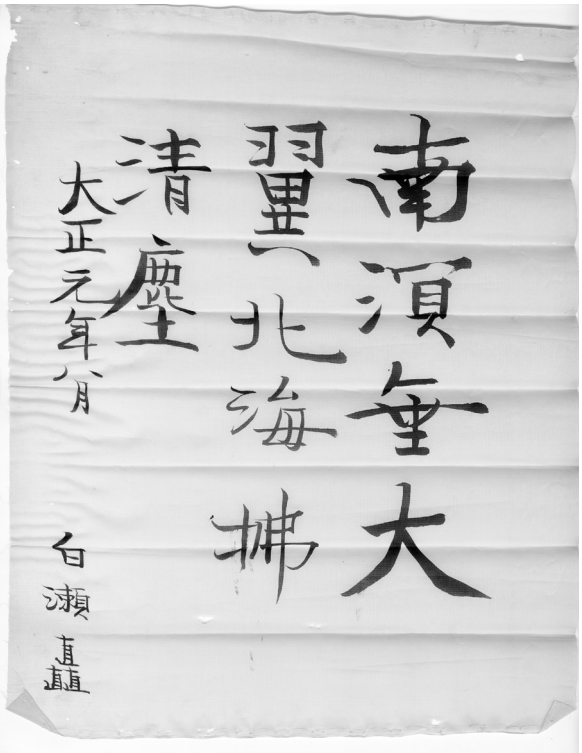
南極探検隊員村松進氏の令兄村松甲府病院長は、一昨日入峡せる白瀬隊長及び野村開南丸船長の為めに、同夕市内各新聞社長及び綿引竹次郎氏、川上医学士等を三省楼に招待したるが、席上白瀬隊長は探検の由来及び苦心談をなし、中途以後後援会と意思の疎通を欠き、後援会は探検を助くるにあらずして、殆ど探険の主人の如く種々の命令を発し為めに、探検隊は当初の目的通り極に達する事能はざりしも、シャックルトン氏以下が不可能となせる三百尺の氷壁登攀を遂げ、而もアムンドセンが三四十尺の氷壁登攀に数日を要せるに対し、三百尺の登攀を二昼夜半に遂行し、兎も角も南緯八十度五分迄進みて幾許の研究に成功せるは、中心私に愉快を感ずる所なりと説き、更に後援会の干渉及び世人の非難も、要するに探検の実績を挙げしめんとせる結果なれば、予等は寧ろ之に感謝するものなり、と述べ終つて、野村船長より航海苦心談ありたるが、南極探検隊が仮令何等の功なかりしとするも、僅々二百噸の小船を以て無事南

南極活動写真会広告
（「山梨日日新聞」大正元年８月21日付）

極の航海を完うし得たるは、海国の為めに気を吐くもの、而も船長の談中未だ世に知られざる事実あるを以て、左に其要点を記さん（略）

（大正元年八月二十二日付）

このように、白瀬南極探検隊の帰国後の活動が、いち早く甲府で開催されたのは、ホスト役を村松進の実兄である村松學佑が担っていることからも、白瀬の南極探検事業において村松兄弟が一定の存在感を有していたことを示唆している。白瀬は公式なレセプションのほか、甲府桜町の村松家を来訪しており、學佑・進兄弟と學佑の二人の息子、船長の野村らとともに撮影された写真が残されている。



白瀬が村松家でしたためたものと思われる書
山梨県立博物館蔵（村松家資料）

この活動写真会で使用された南極で撮影された映画は現存し、作品としては「日本南極探検」と題され、帰国後の白瀬による講演会活動にも使用され、現在は東京国立フィルムセンターなどにプリントフィルムが保管されており、国立映画アーカイブでも閲覧できる。[39]

また、活動写真会でも披露された南極のペンギンの剥製についても現存しており、村松進が遺した剥製[40]が山梨県内の個人に所蔵され、「たんけん！はっけん！南極展」でも展示のご協力をいただいた。

白瀬南極探検隊は多数のペンギンを捕らえているが、南極でのペンギンの捕獲には、村松進も活躍を示しており、多田の「南極探検日記」にも次のような記述がある。[41]

第二遊撃隊は村松、花守、吉野の隊員と渡邊水夫とによつて組織され、今進撃中である、（略）後隊長船長以下全員、前甲板に並んで、今日の捕手一同は各片吟（ペンギン）を抱ひて、前列に並び、記念の撮影をした。（略）片吟鳥捕獲西川、村松、渡邊、吉野各勇士連の気焔、花守山邊の海豹談で打興じつゝ、夕食を美味しく喫した。（明治四十五年一月五日）

多田の詳細な描写によって、現存する別掲の写真[42]は、まさにこの捕獲作業の

南極探検隊記念絵葉書　山梨県立博物館蔵
前列右端が村松進、多田の記録通りペンギンを抱いた捕獲者たちが最前列に並ぶ

「たんけん！はっけん！南極展」で展示された
村松進が持ち帰ったアデリーペンギン剥製

のちに撮影されたものとみることができる。

「たんけん！はっけん！南極展」ではアデリーペンギンとコウテイペンギンをあわせて一〇羽展示しているが、村松進らが持ち帰った剥製は、近年の学術的標本と比較しても遜色のないプロポーションを保っていた。それは多田の次のような記録に裏付けられる。[43]

高川水夫長は、いつしか片吟鳥の本剥製を畢つて、船艙の上に飾つて居る。傍に生きた実物が居る丈け、真に近いものが出来上つた。何しろ道具がないのと速製だから最上とはいかぬが、不出来でもない。（明治四十五年一月七日）

設備も技術も経験すらないなかで、はじめてのペンギンの精巧な剥製をそれなりに製作しえたのは、まさに現地で生きたペンギンをお手本として製作したからにほかならない。

村松進らがもたらしたペンギンの剥製の来歴については、先に紹介した村松菊枝の記した回想にみることができる。[44]

戦前私の生家は甲府の桜町にありましたが、その座敷の床の間の片隅にガラスのケースに入った剥製のペンギンが立っていました。もの心つく頃から見慣れていましたが、一度そのふっくりしたおなかを撫でてみたくて、ある日そっと重いかぶせ蓋をとって、白いおなかと黒い背中に両手をあてみました。ところがその埃臭いことといったら息がつまりそう。びっくりして撫でるどころかそうそうに蓋をしてしまいました。このペンギンは白瀬南極探検隊の一員であった進叔父が齎したものです。

山梨と南極の縁を結んだ村松進が郷土に遺した南極のお土産は、親族に大切に守られ、またそのご協力によって、山梨にやってきてちょうど一一〇年目の節目に、「たんけん！はっけん！南極展」で改めて遠く未来の山梨の人々にお披露目されることになったのである。

最後に南極から帰国したその後の村松進についてみてみたい。墓碑銘には南洋興業株式会社に入りマーシャル諸島のヤルート島に赴任し、帰国後は実業に取り組む、とされているものの、その足跡は詳らかでない。

南極探検隊に参加する前にはなるが、『幽谷集　故秋山珩三遺稿』[45]に村松進らしき記述がみえる。

姉上に十円返金する約束有之候、是は例の村松進より取りたる金に御座候

これは明治三十八年（一九〇五）十月十一日の横浜においての書簡とされ、秋山珩三は山梨県巨摩郡南湖村（南アルプス市）出身で、台湾で視覚障害者教育にあたった人物である。[46]また、秋山はキリスト教信者とされることから、地縁や信仰上のつながりがあった可能性もあるだろう。村松進は前述のとおり、自らは「無宗教者」と称していたが、前述の村松進の実姉である小島みつじの回想には次のような記述がある。[47]

私が五、六歳の頃と思いますが、折々甲府よりキリスト教の伝道に来られる宣教師に導かれ両親をはじめ私共兄弟まで洗礼を受けましたのは明治二十五年頃だつたでしょうか。自分所有の家作を提供し、集会やら日曜学校をいたしましたが、おぼろげながらいつも記憶に残つております。

村松進にとっては幼少の頃のことであり、彼の自己認識では「無宗教者」であったかもしれないが、村松家とキリスト教に関わる人脈のなかにあったことは間違いなく、多田恵一が一時帰国中に甲府を訪れた際、村松進のふたりの兄である村松學佑・覺夫とともに面会した前述の山本節（峡雨）[48]は、甲府教会を中心としたキリスト教信者のひとりである。村松進の南極探検参加前後の動向については、山梨のキリスト教関係者とのつながりから追うことも、ひとつの手掛かりとなる可能性がある。

探検隊帰国時（明治45年６月）に描かれたペンギン
山梨県立博物館蔵（村松家資料）

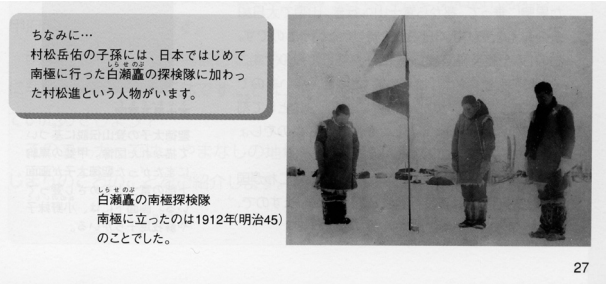
村松進の実業についても、村松定史氏が「ヤシの実と貝殻」の思い出を語られているほか[49]、その動向を追うことができる資料がない。当時の官報をみると、大正十一年（一九二二）の東京製飴株式会社の取締役の就任と辞任に関する登記に、村松進の名前を見つけることができる[50]。村松菊枝氏の回想に「（南洋興業株式会社の）退社後、東京で飴の会社を創ったとか。」とあり[51]、恐らく村松進本人とみてよいだろう。誠に手掛かりが少ないなかではあるが、日本人最初の南極探検へ参加した輝かしい足跡を持つ村松進という人物の実像をより明らかにするとともに、村松のような一隊員の姿を明らかにすることで、白瀬南極探検隊の業績の全体をより詳らかにする一助となるよう、今後も調査を深めていきたいと考える次第である。

昭和二年（一九二七）六月十四日、村松進は満四十一歳という若さで逝去する。その九年後、開南丸出航の地である芝浦に「南極探検記念碑」が建てられることになり、その際に白瀬矗から村松進の義姉である村松信子に宛てた書簡が次のとおり残されている[52]。

拝復十一月廿日付御懇書拝承致シマシタガ、老生近時老衰ノ為メカ身体痛ミ出シ、且ツ風邪ニ罹リ発熱甚シク、目下臥床中デアリマスカラ、失礼デスガ若シ御来訪下サラバ、本月末頃ニ御願致度御返信申上ゲマス。

怒々敬具

追テ十一月二十八日、芝浦ヘ記念塔建設并ニ物故諸氏ノ慰霊祭挙行トノ事デシタガ、右ハ十二月中旬後ニ延期ノ事聞知シマシタ。
実ノ処、老生ハ今回ノ事柄ナゾトモ表面一切関知セズ、万事生存有志者ヘ御任カセ致シ、老生ハ唯名前ヲ提供セシ丈ゲデアリマス。
アナタ様ノ御健康ヲ祈リマス。



『やまなしはじめて物語ガイドブック』（2006年）で紹介される村松進

おわりに

筆者が山梨から南極へと渡った村松進という人物の存在を知ったのは、この

令和４年夏開催の「たんけん！はっけん！南極展」会場

稿を起している今から一七年ほど前で、「やまなしはじめて物語」という企画展の構想を進めている頃のことで、かなりの年月を浪費してしまった。山梨の近代を代表する人物を展示する山梨近代人物館の対象とする人物にも入れることができなかった。これもひとえに、筆者の調査・研究の不十分さゆえと、本稿の至らなさとを合わせてお詫び申し上げるほかない。

それでも幸いに村松定史氏と石船清隆氏のご教示の賜物として、村松進の業績の一端を「たんけん！はっけん！南極展」でご紹介することができ、その成果の一部や魅力を本稿として起こすことができた。ご両者には心から感謝を申し上げたい。また、村松家をはじめとするみなさまが、村松進や白瀬南極探検隊に関する貴重な資料を大切に保存されていたことが、南極と山梨の縁をつないだ村松進のことを現代に伝える大きな礎となり、南極にまつわる様々な研究におけるかけがえのない財産になっていることを改めて申し上げたい。

他方で、村松進が早世したこともあり、本人に関する資料が少ない状況があり、今後は本稿でも指摘しているように、さまざまな角度からの検討や、他の隊員の研究との連携などが必要となると思われる。南極は現在においても、「挑戦」に相応しい対象で、私たち人類社会のさまざまなテーマを象徴し、内包している場所である。この場所に挑んだ人々の物語を学び、解き明かしていくため、各位には今後もご助力をお願いする次第である。

註

（1）白瀬矗（しらせのぶ）　文久元年（一八六一）六月十三日生まれ　昭和二十一年（一九四六）九月四日死去　出羽国由利郡金浦村（秋田県にかほ市）出身の軍人（陸軍中尉）、日本で最初に南極に足を踏み入れた南極探検家　白瀬の生涯と業績については、白瀬南極探検隊記念館（秋田県にかほ市）の一連の刊行物を参照。

（2）政府の支援が得られなかったため、大隈重信を会長とする南極探検後援会が活動を支援。資金を義援金から得ることとした。同会の公式報告書は次のとおり。
南極探検後援会編『南極記』大正二年（本稿の白瀬隊の基本的な事項は同書による）

（3）国際地球観測年（International Geophysical Year ; IGY）　昭和三十二年（一九五七）七月一日から翌年十二月三十一日に実施された国際科学研究事業。

（4）国際地球観測年に合わせて参加。以降中断を挟み令和五年（二〇二三）秋に派遣されれば六五次となる。初期の南極地域観測事業の報告として、文部省『南極六年史　南極地域観測事業報告書』一九六三　および同『南極観測二十五年史』一九八二がある。

（5）日本の南極探検・観測を通史的に紹介するものとして、国立科学博物館で開催の展覧会図録である『ふしぎ大陸南極展２００６』平成十八年などがある。

（6）白瀬の南極探検隊は、衆議院が補助金支出を可決したものの政府は支出しなかった。昭和の南極地域観測についても、政府の負担は一部にとどまり、越冬などの活動を可能としたのは朝日新聞社や国民の義援金であった。

（7）村松進（むらまつすすむ）　明治十八年（一八八五）八月十八日生まれ　昭和二年（一九二七）六月十四日死去　山梨県西八代郡市川大門村（市川三郷町）出身の軍人（海軍海兵隊）、探検家、実業家

（8）矢田喜美雄（やだきみお）　大正二年（一九一三）九月十七日生まれ　平成二年十二月四日死去　山梨県東八代郡増田村（笛吹市）出身のオリンピアン（ベルリンオリンピック男子走り高跳び五位入賞）、新聞記者

（9）山梨県立博物館企画展　たんけん！はっけん！南極展　壮大な自然と人々の物語　令和四年（二〇二二）七月十六日から九月五日まで開催　内容は山梨県立博物館『たんけん！はっけん！南極展　壮大な自然と人々の物語　展示図録』令和四年を参照

（10）村松志孝（むらまつしこう）　号は蘆洲（ろしゅう）　明治七年（一八七四）六月十四日生まれ　昭和四十九年（一九七四）五月一日死去　山梨県八代郡市川大門村（市川三郷町）出身の郷土史家　「郷人の南極探検」（『市川大門町誌』昭和四十二年）

（11）村松岳佑（むらまつがくゆう）　文政五年（一八二二）十月生まれ　明治元年（一八六八）五月二日死去　甲斐国巨摩郡五開村（富士川町）出身の医師

（12）村松學佑（むらまつがくゆう）　明治二年（一八六九）十月二十五日生まれ　大正十四年（一九二五）四月一日死去　甲府県八代郡市川大門村（市川三郷町）出身の医師

（13）明治三十二年（一八九九）の中学校令によるもの（尋常中学校→中学校）をはじめ、当該期は山梨県尋常中学校→山梨県中学校（明治三十二年）→山梨県第一中学校（明治三十四年）と改称し、明治三十九年（一九〇六）に山梨県立甲府中学校となる。

（14）村松定史「「南極探検隊員〈村松　進〉」補遺」（市川地区文化協会『蛾眉』第五〇号令和三年）

（15）村松菊枝「白瀬南極探検七十周年を迎え進叔父の想い出」（市川大門町文化協会『蛾眉』第一一号　昭和五十七年）

（16）「山梨県立甲府中学校一覧」　大正九年　山梨県立博物館所蔵（甲州文庫）および山梨県立甲府中学校同窓会校友会「創立五十周年記念誌」昭和五年　山梨県立博物館所蔵（甲州文庫）掲載の卒業生一覧より

(17) 村松定史「南極みやげ――〈佃〉と〈村松　進〉のこと」（市川地区文化協会『蛾眉』第四八号　令和元年）

(18) 多田恵一『南極探検私録』明治四十五年　国立国会図書館所蔵　一〇九頁
多田恵一（ただけいいち）　号は春樹　明治十六年（一八八三）生まれ（※著書『南極探検日記』三九八頁の記載〈隊員の年齢順が十六位で明治十六年生とは云々〉による）
昭和三十四年（一九五九）十月十七日死去　岡山県御津郡江与味村出身の探検家
なお、白瀬南極探検隊隊員の調査成果として次の報告書を参考とした。
ＮＰＯ特定非営利活動法人　白瀬南極探検100周年記念会編集委員会『白瀬南極探検隊出航110周年記念　秋田県にかほ市白瀬南極探検隊親族調査・交流業務報告書　南極に立った挑戦者たち～祖先の誇りを永遠に～』令和三年

(19) 「（3）名刺帖　レソツネナラムウ井ノク迄」　白瀬南極探検隊記念館所蔵

(20) 白瀬は、南極から帰国後、活動写真会の甲府での開催に関連して、大正元年（一九一二）八月二十日に甲府桜町の村松學佑邸を訪れている。

(21) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　明治四十三年十一月三十日付

(22) 内藤文治良（ないとうぶんじろう）　号は松影　明治二年（一八六九）二月一日生まれ
昭和三年（一九二八）五月二十二日死去　甲斐府山梨郡清田村（甲府市）出身の郷土史家、実業家、政治家

(23) 前掲の小島みつじ、村松菊枝の回想よれば村松進は「搭開南丸将上南極探検之途賦此乞正」という別の漢詩を白いハンカチに記して形見として残したという。峡雲は村松進の号。

(24) 多田恵一『南極探検日記』大正元年　国立国会図書館所蔵

(25) 白瀬矗『南極探検』大正二年　国立国会図書館所蔵

(26) 「村松信子宛渡邊近三郎差出書簡」昭和三十三年三月　山梨県立博物館所蔵（村松家資料）

(27) 「白瀬南極探検隊五十年祭記念の集い」昭和三十五年十一月二十九日　山梨県立博物館所蔵（村松家資料）

(28) 渡邊近三郎「南極探検隊の料理日記」（『婦人世界』第七巻第一〇号　実業之日本社大正元年）、同「南極探検隊の料理日記」（『婦人世界』第七巻第一一号　同　大正元年）、同「氷塊で飯を炊く」（『婦人世界』第七巻第一三号　同　大正元年）個人蔵

(29) 村松進「南極探検隊の濠洲キャンプ生活」（『成功』第二二巻第一号　成功雑誌社　明治四十四年十二月）、同「南極探検隊員滑稽談」（『成功』第二三巻第三号　成功雑誌社明治四十五年七月）、同「南極探検隊員開南丸航走中の生活」（『成功』第二三巻第四号　成功雑誌社　明治四十五年八月　※七月三十日に大正に改元）国立国会図書館所蔵

(30) 雑誌『成功』の出版元である成功雑誌社は、南極探検後援会の事務局であり、社長の村上俊蔵（濁浪）は同会専任幹事。

(31) 日光丸（にっこうまる）　日本郵船のオーストラリア航路定期船。総トン数五五三九トン。日露戦争戦時徴用を経て明治三十九年（一九〇六）就航。

(32) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　明治四十五年四月七日付

(33) 前掲『南極探検日記』

(34) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　明治四十五年五月十六日付

(35) 村松鍬三・進の父は前掲のとおり、明治二十八年（一八九五）十月五日に死去。

(36) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　大正元年八月十三日付

(37) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　大正元年八月二十日付

(38) 「山梨日日新聞」マイクロ縮刷版　大正元年八月二十一日・二十二日付

(39) 国立映画アーカイブ（https://meiji.filmarchives.jp/works/02_play.html）令和五年二月二十二日閲覧

(40) アデリーペンギン剥製　個人蔵

(41) 前掲『南極探検日記』

(42) 「南極探検記念絵葉書」昭和十一年　山梨県立博物館所蔵（村松家資料）

(43) 前掲『南極探検日記』

(44) 前掲「白瀬南極探検七十周年を迎え進叔父の想い出」

(45) 秋山善一『幽谷集　故秋山珩三遺稿』明治四十一年　国立国会図書館所蔵

(46) 秋山珩三略年譜（http://www.lajohn.com/archives/pj/Akiyama.G/chronology/Kurohane.htm）令和五年一月十五日閲覧

(47) 前掲「「南極探検隊員〈村松　進〉」補遺」

(48) 山本節（やまもとせつ）　号は峡雨　元治元年（一八六四）十二月二十八日生まれ　昭和十三年（一九三八）二月九日（『山本峡雨遺稿』掲載の履歴〈村松志孝稿〉では九日、同巻頭掲載頌徳碑には十日とあり）死去　甲斐国巨摩郡西條村（昭和町）出身の教師、新聞記者

(49) 前掲「南極みやげ――〈佃〉と〈村松　進〉のこと」

(50) 「官報」第二九五二号　大正十一年六月六日および「官報」第三〇四二号　大正十一年九月二十日　国立国会図書館所蔵

(51) 前掲「白瀬南極探検七十周年を迎え進叔父の想い出」

(52) 「村松信子宛白瀬矗差出書簡」　山梨県立博物館所蔵（村松家資料）

（山梨県立博物館）